

なくそう貧困。命の水を！

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2017年夏

130

特集

自立模索する南アジアの女性





since 1979
公益社団法人アジア協会アジア友の会
Japan Asian Association & Asian Friendship Society

JAFS

目次

「巻頭言」パンダンが縁 広く伝えたい	02
特集＝自立模索する南アジアの女性	
差別と慣習に向かって模索	04～06
インドでの啓発活動	07
女子大生インターンがワーク体験	08
2016年度の活動報告／2017年度の事業	09～19
貧困対策／環境／水／子ども／国際交流／	
罹災者支援／サイクルエイド／国内での普	
及啓発の各事業	09～18
2017年度 社員総会報告	19
海外からの報告	
水道パイプラインができるまで	20・21
井戸寄贈報告	22～25
フィリピンの島で植林ワークキャンプ	26
「新・The 社会貢献」法人紹介	27
「JAFS プラザ」＝国内活動	28・29
熊本地震から1年過ぎて……	30・31
新入会員ご紹介・領収報告	31～33
「里子の笑顔」「アジアの友から」	34
「環境コラム」	35



アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体（NGO）です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、井戸建設（累計1898基）や植林（累計250万本）、子ども教育支援を中心に活動しています。

全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、パングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <http://jafs.or.jp>

本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費（社員会費は除く）は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

巻頭言

いつの時代も新聞社の社会部記者の取材範囲は多岐にわたります。事件事故や災害。行政、選挙、裁判。埋もれている事実の発掘。最新のトレンドや人々の喜怒哀楽。日々のあらゆる出来事が取材の対象です。

パンダンが縁 広く伝えたい



足達 新
読売新聞中部支社長

多くの人から話を聞くことができ、日本に留学中、古里の窮状をJAFSに電話で訴えたアマンテさん。岐阜の会社で研修を積んで成長した若手技師の通称ダニー。村上事務局長は初めて町を訪れた際、使用人の少年を日本軍に殺された老女から「ユー・キルド・マイ・ボーイ」と激しくののしられ、その家のタンスの扉には銃剣の貫通した傷跡が今も残っていました。半世紀前の不幸な歴史を乗り越え、交流へと動

を訪れました。その足で村上事務局長とネパールにも飛び、完成間近のチョータラ村の産婦人科病棟も取材しました。実は翌月に大阪府警キヤッブへの異動が決まっております。悠長に海外に出かけている場合ではなかったのですが、上司に頼んで着任日を10日ほど遅らせてもらい、予定通り記事にすることができました。

JAFSのキャッチフレーズが本年から「なくそう貧困。命の水を！」に変わりました。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的な人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。

一、地球の自然環境を大切に守ります。

一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。

一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上

き出した軌跡を帰国後、「友好のパイプライン」のタイトルで夕刊に連載しました。

これが縁でJAFSとはお付き合いが続き、様々な活動と出会います。日印友好学園コスモニケタン、土と水と緑の学校、ぞうすいの会……。阪神大震災後、西宮の仮設住宅を慰問するインド人を紹介してくれたのもJAFS会員の方でした。そして1998年2月、パイプラインの完成式の取材で再びパンダン

プロフィール

1959年神戸市生まれ。同志社大卒。1982年読売新聞大阪本社入社。社会部次長、京都総局長、写真部長、編集局次長、大阪読売サビーエ社長を経て、2016年6月から読売新聞中部支社長。

南アジアの女性自立へ

支援活動で出会った人たちとともに



ネパール、ボテシバ村の婦人会。生理中の過ごし方を皆に聞いている。ようやく恥ずかしさを捨て、積極的に手を挙げ始めた女性たち＝2月24日

差別と慣習に向かって模索

父親が勝手に結婚決める

ネパールのサンギータさんは18歳。16歳のとき、隣村に住む、会ったことのない50歳の男性と結婚しました。彼にはすでに奥さんが2人いました。彼女のお父さんは、家以外に田畑はなく、日雇い労働で家族6人を養っていました。生活が苦しく、1人でも少なくなれば楽になるだろうと考えていた矢先、「娘と交換に牛をあげるよ」と声をかけられ、彼女の気持ちも聞かずに縁談を決めてしまいました。

やがて、妊娠8か月になりました。しかし、毎日3回の水くみ、ご飯づくり、家畜の世話や田畑の手伝いは、欠かさずしなければならぬ彼女の仕事です。誰も手伝ってくれません。

そのうえ夫は「得意の踊りを披露して接待しなさい」と言いつつ、彼女を客の前で踊らせた。客が彼女の大きなお腹を見て「そんなことはしなくていい」と言っているのに。彼女は一言も文句を言わずに踊りました。翌日、破水して早産しました。もう少しで赤ちゃんの命が危ないところでした。

以上は、ネパールで看護師として働く私たちの仲間から聞いた話です。

うになったように見えました。

そのときちょうど、ご主人が戻ってきました。酔っていました。なぜこのようになるまで放っておいたのかと私が尋ねたら、「むだなお金を使える余裕はない」。さらに会話を交わすと、はつきりと口こそ出しませんでしたが、もしサビナさんがこの傷で亡くなっても、次の新しいお嫁さんをもらえばいい、と思っていることが読み取れました。女性を何とと思っているのでしょうか。

しかし、もっと悲しかったのは、サビナさんがそのご主人の様子に、文句一つ言わず黙っていたことでした。

古い法典が暮らしを支配

なぜ、南アジアの女性たちがこのような状況になるのか。それは現地の歴史と深く関係があります。人口の約85%がヒンドゥー教徒のネパールでは、古い教典に基づく教えが、単に信仰としてだけでなく、社会的規範として人々の生活全般を支配しています。

その一つで、ネパールの家族法に大きな影響を与えていると思われるのが、マヌ法典です。そこには「幼いときは父の、若いときは夫の、夫が死んだときには息子の支配下に入るべし。女は独立を享受してはならない」と記されています。

女性を差別した法律は無効になっていくはずなのに、こうした根深い社会

男子産まぬと「役立たず」

こんな女性とも会いました。第1子は女の子でした。家族にとつて初の赤ちゃん。普通ならば大きな喜びに包まれるはずですが、夫の両親は「次は男の子を生んでね」という言葉だけを残し、孫の顔もきちんと見ずに帰っていききました。

間もなく2人目を妊娠した彼女は、元氣な子を産みたいと思うより、男の子であってほしいという気持ちの方が大きかったといいます。そして、次も女の子でした。それを義母から知らされた義父は、病院に来る途中で引き返し、孫の顔を見に来ることはなかったそうです。

彼女は役立たずの嫁のレッテルを張られてしまいました。今の彼女の夢は、夫の両親との同居をやめ、家族4

人で暮らすことです。この女性、実は私の義姉です。都会の女性でも、こうしたことが決して珍しくありません。

女性は子を産むという大事な役割を担っているのに、そのため必要な生理の最中、出血しているのだけが残った存在と言われます。男性や目上の人に触れてはならず、食事をつくるための台所への出入り、毎朝の神様への祈りをしてはならない慣習になっています。

家から出て、牛舎や生理中の女性たちが過ごす小屋に入れられた経験のある女性もいます。「日本では初潮を迎えたときにごちそうをつくってお祝いをするのよ」と私が話すと、目をまん丸にして驚かれました。

女性たちのこのような状況は、国や地域によって多少違うにしても、南アジアでは普通に起きています。根底に、女性より男性の方が上という考え

方が根強くあります。さらに、今でも強烈に印象に残っていることがあります。

井戸の完成式のためネパールのビトウリ村を訪れたときでした。「これから川の水で生活しなくていい。うれしい！」と喜んでいたサビナさん。井戸の前で記念写真を撮り終えて帰ろうとした私に、「薬を分けてもらえないかしら」と声をかけてきました。

どうしたのかと尋ねると、農作業で汚れたTシャツをそっとめくってくれました。そこには500円玉ほどの大きさのものが、驚くほど化膿していました。最近できたものではないようでした。いつからできているのか尋ねると、「この子が生まれて間もない頃」と言いつつ、そばにいた7歳の娘を指差しました。小さなできものだったものが、治療しない間に悪化し、腫瘍のよ



水道パイプライン工事の共同作業にも女性も参加＝2月22日、ネパール・ボテシパ村

背景と、そこにあぐらをかく男性たちの存在が、続いているのです。

南アジアの女性たちが抱えている状況と問題を図式的に箇条書きすると、次のようになると思います。

◆女性というだけで一歩退く、または前に出ない

⇐ 合意形成の場に女性が不在

◆女性というだけで学校に通わせてもらえない

⇐ 識字率が低く、自分で情報を得られない。知識が低く、自信を持ってない

◆男性の目をいつも気にしている
◆教育の場で性教育が行われない
⇐ 異性をよく理解できない

女性は、家事全般を広く担っています。農村女性の一日の暮らしを観察して、家事時間を調べてみると、おおよその次のようになります。

食事づくり3時間／畑仕事4時間／家畜の世話や草刈り2時間／水運び1・5時間／燃料の薪集め、薪運び1・5時間／その他の家事や子どもの世話3時間

そんな中、女性たちは、どのようなことを求めているのでしょうか。JAFS

F Sには、現地での活動などを通じて、こんな声が届いています。

「私たちの話をきちんと聞いてほしい」「自分たちの声にアクション、フィードバックがほしい」「努力が実った実感を得たい」「読み書きを覚え、新しい事をもっと知りたい」「娘に幸せになってほしい。私たちと同じように過ごしてほしい」

婦人会をつくって意識変革

ネパールでは現在、「婦人会」をつくって活動を始めています。地震復興を支援する中で、女性の役割が欠かせないと実感したからです。現状に対する女性の本心を、会のメンバーで3人の子を持つミナさんから聞きました。

「私は、女性は早く結婚する方がいいと言われて16歳で結婚したのよ。学校には3年生まで通ったけれども、十分な読み書きができないの。だから子どもたちは学校に通って、しっかりと教育を受けてほしいの。そうすると子どもに守ってもらえるでしょ。」

幸い、私の夫はとても優しく、私が畑仕事に行っている間に食事をつくってくれるの。でもその事を快く言わないご近所さんもあるわ。『旦那さんに食事をつくらせるなんて』って。

最近、婦人会で、布ナプキンを生理用品として使う活動と月経の話をする機会があったの。みんないろいろ悩んだり考えたりしているんだとわかつ

て、安心したわ。口に出すのは恥ずかしいと思っていたけど、話さないといけないものね。娘はまだ小さいけれど、生理中に行動範囲が限られたり、食事をつくれなかったり、学校に行きづらかったりということが、布ナプキンの普及で改善してほしいの。

× × ×

JAFSはこれまで38年間、安全な水を提供し、女性の水くみ労働の軽減を図ってきました。すべての人が公平に参加でき、成果を幅広く公平に享受できるというスタンスで活動しています。しかし、現地の女性から「私たちが話し合いに参加してもいいの？」という声はまだ多く聞こえてきます。

女性たちに、自信を持ってもらいたい。JAFSが考えるゴールは、家事労働だけで終わってしまう人生ではなく、女性たちが地域を良くする活動に積極的に参加するようになり、役割を持つことです。2017年度も、さまざまな側面から女性に役割を担ってもらい、誰も取り残さないプロジェクトを、力を入れて実施していきます。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

インド人がインド女性のために RUDYA 地位向上目指して啓発活動



国際女性の日に女性自助グループの集会で、女性の起業や地位向上について激励するRUDYA代表カシナート・D・デオガデ氏＝3月8日、インド・マハラシュトラ州ガッチロリ

JAFSの支援先であるアジア現地の人々自身の手によっても、女性の地位向上を目指す啓発活動が行われています。インドにある提携団体RUDYAが、国際女性の日を祝い、ともに活動している自治体や女性の自助グループの人たちと啓発活動をしました。現地からの報告です。

RUDYAとAFSガッチロリの共同企画として、国際女性の日に当たり、女性自助グループの集会在3月、インド、マハラシュトラ州のトゥクム村で開かれました。複数の村から自助グループのメンバーが参加しました。伝統的な明かりを点灯し、サラスワティ女神の門へ花輪を献上して、プージャの祈りによってプログラムの開会式が行われました。

RUDYA代表カシナート・デオガデは、女性ゲスト全員にバラの花を贈り、歓迎のスピーチをしました。女性自助グループの活動を通して、経済・社会・教育分野で女性の著しい発展が成しとげられ、男性と比べて成功を収めていると述べました。さらに、インドの憲法は女性に平等な権利を与えて

おり、アメリカやイギリスの女性が発見したのと同じように、インドでも女性に選挙権が与えられたと語りました。また、自助グループの女性たちが起業して収入を得て各家庭の生活レベルが向上するように、関連政策や小規模事業に関する情報を提供しました。

AFSガッチロリのプレマナンド・ソナタケ代表はスピーチで、女性はこの観点から見ても弱者ではないと説き、さらに、女性は強い力を持ち、自立により極めて堅固な自信を得ることができると主張しました。女性が強い精神力を培い、政策を通して特別な恩恵を授かることにより、女性の経済状況が大幅に改善すると述べました。

ピラス・ブルグワー氏は、女性の権利保障に関する条例を女性が正しく理解できるように促すことにより、家庭内暴力やその他の非人道的行為に立ち向かうことができるはずだと語りました。女性自身が自分を守る力をつけるためにも法規学習会に参加するよう呼びかけました。

ボダリ医療センターのカウンセラーであるマドゥーリ・ポヤー夫人は、鎌状赤血球症に関して説明し、女性の婚前血液検査の重要性を説きました。(RUDYA代表 カシナート・D・デオガデ、翻訳・ECIC国際外語専門学校 石橋美里、菊永千晴、田中美恵先生)

2016年の活動報告 みなさまのお力で 達成できました

さらに各国から
要請が来ています

2017年の支援事業

2016年度は4月に熊本を震度7の地震が襲い、JAFSは対応に迫われましたが、みなさまのお力によって支援活動を展開することができました。アジア各国への開発支援もこれまで通り、水、子ども、貧困対策、環境、

サイクル・エイドなどの各事業に取り組みました。各国からはさらに、現地の状況に応じた支援要請が来ています。人々が再び貧困に陥らないように、2017年度も地域の人々と、しっかり連携して取り組んでまいります。



フィリピン、ソルソゴン州でのマングローブの植林。樹々が育った水辺がやがて豊かな漁場となる

フィリピンのソルソゴン州でのマングローブ植林支援は、

JAFSの現地提携団体であるRUYA、HDSI(以上インド)、KAFS(カンボジア)、SARVODAYA(スリランカ)にそれぞれ、運営とマネージメント強化のための費用を助成しました。

提携NGOに運営費助成

インドのムスカ村に念願の病院を設立できることになり、現在は基本資機材の導入を支援中で、2017年度初旬に開院予定。また、中国の農村の医療支援は次年度に延期になりました。

インドの村に念願の病院

ネパールでは農村家庭へのトイレ設置を促し、農家20世帯に対し各1基のトイレを新たに建設しました。地域の公衆衛生環境を向上させられました。

ネパール被災地にトイレ

地域の人たちの熱心な維持管理によって、安定して成長してきています。スリランカでは、長年の農村ファシリテーター育成支援で、優秀な人材が育つていくことが確認できました。ネパールでは、小作農家の所得を引き上げる支援をしました。36人に養蜂を指導して養蜂巣箱を設置し、5000kgの蜂蜜を収穫できました。

貧困対策事業

2016年度は、各国でしているマ

マイクロクレジットが困難に直面

マイクロクレジット(十分な資金のない人々を対象とする少額の融資)事業が、多くの困難にぶつかりました。カンボジアでは、新たな貸し付けが

国の規制によってできず、すでに貸し付けられた資金の回収のみができました。

インドの農村の信金では、貸付残高が横ばいで、地域ニーズに 대응することができませんでした。

新しく要請のあったベトナムでも、現地の諸事情で支援ができず、再開のめどが立っていません。

インドのナプキン工場は必要な資金が集まらず、雇用と生産を増やすための必要な資材・機材を購入できませんでした。

一方、着実に成果が上がっている地域もあります。

フィリピンのソルソゴン州でのマングローブ植林支援は、

ネパールで意識が変わった 女子学生インターンのワーク体験記



ネパールの子どもたちに水の話をする宮里真珠さん=3月、ボテシパ村

私は将来、高専で学んだ知識や技術を生かして土壌や水を浄化し、途上国の自立・発展の力になりたいと考えています。しかし国際協力は支援側の一方的な考えではなく、地域の文化や考えを知り現地と一丸で取り組むものだと思います。ただ知識を詰め込むのではなく、現場を自分の目で見て必要な技術を知りたいと思い、インターンとしてネパールでワークに参加しました。

地震でほぼ全壊したボテシパ村で2週間、カトマンズで3週間で過ごしました。ボテシパ村で、水源が移動し水が届かなくなった各集落の水道に水を届けるため、新しい水源地から4日間で600坪のパイプをつなぐ作業をしました。

村の人と一緒にひたすらシャベルや鍬で穴を掘り、パイプを埋める肉体的労働。膝ぐらいの深さまで掘りました。シャベルを使うことに慣れておらず、村の人によく作業を代わってもらいました。今まで国際協力は高度技術支援と、募金や物資支援の2つしかないと思っていました。それなのに私は、パイプを通す技術を提供したわけでも、物資支援で作業効率を上げたわけでも

なく、むしろ足手まといでないのか。支援に来たのに逆に支援されていると感じました。ネパールまで来た意味があったのかと考えてしまいました。そんな私の意識が変わったのは、村のミーティングで女の子たちの夢を聞いた時。多くの子が医者や先生、ダンサーになりたい、カトマンズで働きたいと言った中で、一人が「将来は私も

ば夜、電気も机もない部屋でろうそくを灯してベッドの上で勉強します。ネパールでは学校に行く概念があまりありません。家を手伝い、お金を稼ぎ、16、17歳で結婚するなどして学校に来ない子も多いのです。学校には水場、トイレ、電気、机も十分になく留学など考えられない状態です。きっとJAFSが支援をしていなければ、その子

ここにきている日本人みたいに海外で困っている人を支援したい」と言いました。これが私がネパールまで来た理由だと思いました。学校を訪問したり村で生活する中で、ネパールの子もたちは夢をもつ機会や叶えられる環境が少なく感じました。ボテシパ村の女の子に基本的な自由な時間はありません。朝起きて親の手伝い、兄弟の世話、学校、家畜の世話、農作業...でもそれが当たり前だから文句を言わず普通にこなしています。勉強する暇もなく、テストがあれば

はこのような仕事を知らず、夢を持つこともなかったと思います。私は結局、ネパールで「自分に必要な技術を知ること」はできませんでしたが、技術やお金がなくとも、交流すること、自分の経験を話すことで、自分の世界だけでなく、相手の世界も広げることができる、これがすべての国際協力の基になると学びました。途上国は成長が速く、今の格差が縮まれば日本を超える大国になると思います。これから国を背負う学生を比べると、日本は遊んでばかりで英語も喋れない人が多いですが、ネパールの大学生は大学に行く目的がはっきりしており、英語は当たり前話せます。グロバール人材をもつアジアと衰退していく日本を比べたら、日本は、特に学生は既に越されていると思いました。私は日本の恵まれた環境で、この子たちのために勉強します。日本も最近まで世界からお金を借り支援されていた立場。豊かになった今、技術や教育を世界に還元すべきです。世界がバランスよく分け合えばよくなります。環境分野に興味がありました。今回のインターンを通して、子どもたちの将来の選択肢を増やし、夢が叶う環境を提供する教育にも興味を持ちました。将来の夢と理想を考え、自分に合った国際協力を探していきたいです。(トビタテ！留学JAPAN、沖縄工業高等専門学校4年 宮里真珠)

2017年度 貧困対策 事業			
国	提携団体	実施地域	内容・意義
インド	SPARSH	マハラシュトラ州	貧困層女性の雇用と生理時の心身変調への理解を目指し、環境に優しい素材製の生理用ナプキン工場設置のため機材を購入
	IJSDC	カルナータカ州	貧困層の若者の雇用を生むため、職業訓練校を建設し研修する
	HDSI	マハラシュトラ州	村の女性の雇用を促進するために養鶏グループを支援する
	RUDYA	マハラシュトラ州	ムスカ村の診療所運営を支援する
カンボジア	KAFS	タケオ州	貧困層の生活向上のため、養豚や養鶏、小規模店舗の助業資金を低利子・無担保で5名の連帯保証グループに融資
スリランカ	SARVODAYA	全域	地域に話合と課題解決の場をもたらす啓発プログラムを支援
中国	AFS-Uighur	新疆ウイグル自治区	農村医療を改善するために2007年に設立された病院へ、医師と医療機器などを支援する
ネパール	AFS-Nepal	バグマティ県	山間農村の保健、衛生向上のため、介助ボランティア研修、ヘルスキャンプの開催(10・12月)、施設環境整備、設備補助を支援
		ルンビニ県	農村に女性組合を確立して生活を向上させるために行う少額融資事業。養蜂によって農家の自立を促す
フィリピン	AFS-Sorsogon	ソルソゴン州	漁業で生計を立てている貧困層の人々のため、沿岸地域に自然の漁場となるマングローブを植林する

2017年度 環境 事業			
国	提携団体	実施地域	内容・意義
インド	HDSI	マハラシュトラ州	グリーンスカウト運動普及の活動を支援
ネパール	AFS-Nepal	ルンビニ県/ナラヤニ県/バグマティ県	燃料をまきに頼るネパールでは森林破壊が深刻。国有林の保護と管理を森林信用組合に委託して、植林と森林資源の計画的利用を促進する
		ルンビニ県/ナラヤニ県/バグマティ県	小学生への環境セミナーと、各地で活動するグリーンスカウト運動の苗木代や活動費を支援
		ルンビニ県/バグマティ県等	牛糞を発酵してガスを発生させる装置(バイオガスプラント)を設置し、生活燃料をつくる。環境保全、牛糞堆肥の有効利用、まき集めの重労働からの開放、女性の健康改善にも役立つ。建設費の一部を補助
フィリピン	AFS-Virac, Catanduanes	カタンドゥアネス州	焼畑、違法伐採によって木々がなくなったカタンドゥアネス島、パロンバナネス島の森林再生のために植林する

2017年度 水 事業			
国	提携団体	実施地域	内容
インド	BSVIA / RUDYA / HDSI / SSH	カルナータカ州/マハラシュトラ州/タミルナードゥ州	井戸建設
インドネシア	HOSANNA	北スラベシ州	井戸建設
カンボジア	KAFS	タケオ州	井戸建設
スリランカ	SARVODAYA	全域	井戸建設
ネパール	AFS-Nepal	全域	井戸・パイプライン建設
バングラデシュ	BDP	ボリシャル県、ジャマルプール県	井戸建設
フィリピン	KALIPI	ヌエバエシハ州	井戸建設



スリランカで、子どもたちが植林して環境保全を学ぶ

後述のネパールの小学校の例に見るように、教育機関を通して行う植林や環境保全の取り組みは、地域に問題の大きさを訴え、浸透させるのにとっても有効であることが改めて確認できました。

植林を計画していたが、ここ3年間、気候的に条件が整いませんでした。このため計画を変更し、対象地域の水施設を拡充し清掃をしました。今後、植林を継続します。

地球環境や水資源の保全を目指し

環境 事業

フィリピンなどへ1万本以上植林

て各国で取り組んでいる植林事業は2016年度、ネパール、スリランカの各1カ所とフィリピンの2カ所で行いました(うちフィリピンの1カ所は前述の貧困対策として実施)。植林した本数は、フィリピン8000本、スリランカ275本、ネパール1608本。



インドネシアで、村人たちと貯水池の周りを清掃

グリーンスカウト運動 ごみ収集で新取り組み

同じく地球環境保全の一環として本会が提唱して1986年に発足した環境保全市民運動(通称、グリーンスカウト運動)は、各国現地の提携団体を

水 事業

2016年度はアジア5カ国(インド、カンボジア、スリランカ、ネパール、フィリピン)の農村地域30カ所に

井戸・パイプライン51基を完成

飲料水のための井戸とパイプライン51基を完成させ、安全な飲料水を含む生活用水を確保できました。気候が変動しても水を確保できる手段を確立させていくことが、今後の課題です。

森林破壊に歯止めをかけるべく薪の代替燃料の確保が急務なため、20世帯各1基の牛糞利用バイオガスプラントを設置し、労働軽減、健康改善、排出物のたい肥利用による農業発展にもつなげました。薪の年間使用量を世帯当たり3200Kg削減でき、二酸化炭素排出を年間5t抑えました。(ゆうちよ財団NGO海外援助活動助成事業)

ネパールでバイオガス新設

中心に、さまざまな啓発活動をしています。2016年度は、インドネシアで新たに、清掃とゴミの収集を定期化していく取り組みをしました。

ネパールでは、16年度から2校が新たに加わり7つの小学校で環境セミナーをしました。地震を経た今、持続可能な地域づくりのために、学校を含めてどのような行動が必要か考え目標を立てました。新たな参加校が刺激となり、教師の参加意欲が向上しました。

5カ国の里子489人に教育資金

子ども事業

家が貧しいために教育を受けられない



子どもたちへ初等教育の機会を与え、学習を続けられるよう支援しています。2016年度も教育里親制度を通じて前年度と同様、アジア5カ国

日印友好学園コスモニケタンの寮に、二段ベッドが設置された

インド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、フィリピン)の児童生徒計489名に教育資金を提供しました。ネパール地震被災地でも引き続き、教育の継続が難しくなってきた子どもたちを支援しました。都市部では雇用機会が増えている一方、貧しい家にも生まれた子どもたちの中途退学が後を絶ちません。持続的に安定して職を得るためには教育が欠かせませんが、現場の力不足もあり、それが人々にまだまだ十分理解されていないのが課題です。

今の路上生活者に手差し伸べ



マニラのサンアンドレスで教育支援を受けている子どもと母親たち

フィリピンでは、従来からしてきたマニラ市内から郊外へと強制移住させられた元路上生活の子どもたち(スト

置は、現地の諸事情のために延期し、2017年度に実施することになりました。

インドでは、長年支援してきた日印友好学園2校(コスモニケタン、パダトラ小学校)で、学校環境の整備に取り組みました。生徒の増加にあわせて教室を増やし、教育ニーズに対応できるように、映像を利用したクラスをつくる教材の導入を支援しました。同国タミルナドゥ州デインディガ

ル、ナマカル両県では、HIV/AIDSの児童とその家族5世帯を引き続き支援しました。同国ナグプール県のチャイルドアカデミーの子どもたち36名に継続的な給食や教育、教材の支援をすることができました。加えて、里親の会のプログラムに加入し、持続的に支援ができるよう取り組みました。

ネパールでは給食継続

ネパールでは引き続き、ピトゥリ村スリーサンティ小学校の生徒約200名に、たんぱく質を補給するための卵と牛乳の給食を支援しました。同校を含む7小学校で栄養指導も実施し、また教師を目指す女子大学生へも栄養指導しました。地震被災地では、学校など教育環境の整備を支援しました。

貧しい子のためにモンゴルに保育園

新たな支援地であるモンゴル、ウランバートル市郊外の人口密集地・ゲル地区に、部屋を改築し、資材機材・遊具を導入して、貧しい子どもたちのための保育園を無事に設立することができました。写真。



2017年度 子ども 事業			
国	提携団体	実施地域	内容・意義
インド	SSH	タミルナドゥ州	HIV/AIDSへ直接・間接的な影響下にいる家族の生活の質を向上するための支援
	BSVIA	カルナータカ州	日印友好学園コスモニケタンの収入源を増やし、自立していくために必要なバス、理科実験用の視覚化機材、机、イスなどを導入する
	RUDYA	マハラシュトラ州	日印友好学園パダトラ小学校の児童に必要な教材や授業用の道具をそろえる
ネパール	AFS-Nepal	ルンビニ県／バグマティ県	学校校舎の建設を委ねられている村人に、校舎の建設・増設や簡素な補強を支援する
		ルンビニ県／バグマティ県	ピトゥリ村の学校給食プログラムは、地域のモデルとなり、小学生には政府から給食が支給されているが、幼稚園クラスの子どもたちには行政からの補助はないため、その子たちを支援する
フィリピン	ASI	マニラ市	路上で暮らしていた人々が強制撤去となり、新たな地で暮らし始めた。子どもと保護者への教育、栄養改善、職業訓練、収入確保を支援
		リザール州	貧しい漁師の子たちに人間形成に必要な価値教育を提供するとともに、教育の大切さを子どもや親に理解させ、継続して教育を受ける社会環境を築くための多目的施設デイケアセンターを建設する
モンゴル	MoAFS	ウランバートル市	市郊外の人口密集地ゲル地区に住む低所得層の子どもたちのための保育園を設立するのに必要な教材、備品、部屋改築などを支援

2017年度 子ども 事業 アジア里親の会			
国	提携団体	実施地域	内容・意義
インド	RUDYA	マハラシュトラ州	少数民族の子たちが通う日印友好学園パダトラ小学校の運営費、設備拡充費など
	BSVIA	カルナータカ州	日印友好学園コスモニケタンの運営費
	SSH	タミルナドゥ州	制服代、教科書代、学校の運営費
	AFS-Nagpur	マハラシュトラ州	スラム街に住む子どもたちの給食や教材費
カンボジア	KAFS	タケオ州／コンポンチュナン州	教科書代、文房具代と学校の運営費
ネパール	AFS-Nepal / Yashasvi	ルンビニ県／バグマティ県	学校運営費などを3村5校の子どもに支援
バングラデシュ	BDP	ガジプール県／ジャマルプール県	学校の運営費など
フィリピン	ASI	カビテ州／マニラ市	路上で暮らしていた子どもへの教育を支援し、保護者の教育や所得を支援する

11カ国集いネットワークセミナー

国際交流事業

2016年度は、インドのIT都市バンガロールで、第26回アジア国際ネットワークセミナーを開催し、11カ国から48名が参加しました。基調講演などのほか、参加各国のAFS支部が活動報告し、課題を共有し合いました。AFSバンガロール支部の発足式も行われました。写真左上。



2016年度は、インドのIT都市バンガロールで、第26回アジア国際ネットワークセミナーを開催し、11カ国から48名が参加しました。基調講演などのほか、参加各国のAFS支部が活動報告し、課題を共有し合いました。AFSバンガロール支部の発足式も行われました。写真左上。



ASIの地域開発コースでのフィールド研修

4カ国でスタディツアー
インド、カンボジア、ネパール、フィリピンの4カ国でスタディツアーをしました。
フィリピン、パンドンの水道パイプライン通水20周年と、インド、日印友好学園コスモニケタン設立20周年が相次ぎ、支援者とともに祝いました。
ジャズピアノニスト竹中真氏によるチャリティコンサートが、初めての試みとしてネパールで実現しました。ネパールの伝統楽器との共演が地元でも大好評でした。

職員研修、マニラへ4人

将来の本会のネットワークを担う各国各支部の職員を研修、育成するために、奨学金を出しています。2016年度も、フィリピンのアジア社会科学院(ASI)の地域開発コースに4名(インド、ネパール各1名、地元フィリピン2名)を派遣しました。現在、彼らは各国の本会提携団体の職員、ボランティアとして活動しています。
AFSナグプールのリニ・パラングヤベに、引き続き看護学校への学費を支援しました。ナグプール県内最優秀の成績を収め、表彰されました。
海外ボランティア研修制度では、インターシップ生2名を派遣し、海外現地でボランティア研修をしました。

熊本地震の被災者に泉州タオルを配る



フィリピンの台風被災者に援助物資を届ける



罹災者支援事業 熊本地震被災地へ迅速な対応

2016年4月の熊本地震の被災者を支援しました。初動の物資配布を熊本市内、菊陽町、南阿蘇村などで行い、以降は最大の被災地である益城町を活動地にしました。避難所2カ所の運営を支援し、仮設住居移住後は仮設団地の見回りなどを続けています。全国から多くのボランティアが集まり、迅速で効果的な支援ができました。
本事業は、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームから一部助成を受けて実施できました。
東日本大震災の被災地を訪れて復興を応援する恒例のスタディツアーは、現地での諸事情でできませんでした。

ネパール・比へも

2015年4月のネパール中部大地震の被災地で、低所得地域の耐震住居再建と技術移転を行ない、女性の力による生活再建のため婦人会を設立し、防災に配慮した安全安心な復興モデル地域づくりをしました。物資配布、水インフラや教育機関の復旧など、生活基盤整備を引き続き行いました。
本事業も、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームから一部助成を受けて実施できました。
2016年12月にフィリピンのカタンドウアネス州などを襲った台風の被災者に、緊急食料を配布。これまでの経験から、迅速に対応できました。

2017年度 罹災者支援事業			
国	プロジェクト	実施地域	内容・意義
日本	東日本大震災被災者支援	宮城県南三陸町歌津地区	東日本大震災で被害を受けた宮城県南三陸町歌津地区への訪問を通して被災者を支援する。復興支援によって建設された味噌加工場と特産品販売場である「みなさん館」も訪問する
	熊本地震被災者支援	熊本県上益城郡益城町	熊本地震で被災し、仮設団地に移住した住民の生活の安全を守るために、仮設団地の見回りとふれあいの場づくりを通して仮設団地自治会を支援する
ネパール	ネパール中部大地震被災者支援	シンドウパルチョーク郡	2015年4月25日に起きた大地震の被災地域の復興へ、水などの生活インフラ整備、耐震住居建設、雇用などを支援する
フィリピン	台風ノックテン被災者支援	カタンドウアネス島	2016年末の大型台風で襲われた島で水インフラを復興させる

●…JAFS国際協力基金…●

「地球幸せ募金」貯金箱式募金	栄養失調に苦しむ子どもたちの栄養改善を目的とした給食基金に充てる。または、今年度プロジェクトのいずれかを支援する
「アジア井戸募金」募金箱設置	各家庭や店などに募金箱を設置し、井戸建設支援に充てる
「アジアフレンドシップ夢基金」募金	アジア18カ国の草の根の人々と共同で、「アジアフレンドシップ夢基金」を募り、アジアと世界のより困窮する人々への支援金とする

2017年度 国際交流事業			
国	プロジェクト	実施場所	内容・意義
日本	アジア国際ネットワークセミナー	大阪、奈良	本会のネットワーク活動の理念である「貧困なき一つなるアジアを目指して」をモットーに毎年、様々なテーマで話し合うセミナー
	アジア・ユースサミット	大阪、奈良	「持続可能な地域づくり」に貢献するアジアの若者リーダーの育成とネットワークづくりの機会をつくるために、若者一同が日本に集まる合宿型の国際会議。参加者自らが「地域をよくするプロジェクト」をつくり、実践するための様々な課程を学ぶ
フィリピン	ASI 地域開発コース支援	マニラ市内のアジア社会科学院(ASI)	地域開発を専門に農村の様々な社会的課題を解決する次世代の人材を育て、貧困なき国づくりをするために、2カ月間の地域開発コースへ派遣する人材の旅費、授業料、滞在費を支援



贈呈式で自転車を手にした子どもたち
 2016年12月18日、タイ・ナン県

国内の放置自転車を通学・地域の足に再生

「放置自転車を再生し、世界の子どもたちに贈ろう!」を合言葉に誕生したサイクル・エイド事業。年間50万台の約半数は大阪府内の放置自転車を修理・再生して必要としている人々に贈ります。目的は、途上国の教育や福祉環境の向上などに寄与し、国内外で国際交流の絆を深めることです。2016年度は、堺、八尾、阪南、泉大津、泉佐野、大阪の各市から協力を得て、タイとフィリピンにそれぞれ375台を贈りました。05年に事業を始めて以来、アジア、アフリカ10カ国に計3万台余りを贈ることができました。

タイでは、贈られた自転車は、ナン県で通学する子ども、医療従事者、貧しい農民、環境保全に従事する人々に渡され、活用されています。12月18日にあった贈呈式典では、子どもたち1台ずつ手渡され、地域の教育や福祉の向上、地球環境保全に地域が協力して取り組むことが話し合われました。

また、子どもたちに、自然の成り立ちや有機栽培について学ぶの教育プログラムを行いました。地域で意識を変え、協力しながら、より良い地域づくりが進められています。現地でNGO、行政、村人、学校の先生、保護者たちが、世代や国境を越えて協力する良いきっかけとなりました。

また、地球環境保全への意識を高めることで、同じ地球市民としての視点を持ち、互いに協力しあう国際交流の

推進活動が拡がると期待されます。自転車を通じて各国と交流が活発になって人と人の絆が深まり、草の根の理解と協力の輪が広がってきています。

フィリピンでは、通学する子どもたちや先生、地域のコミュニティワーカーや自警団を中心に自転車を贈りました。農民たちの社会進出や生活向上へつながっています。貧しいために通学や進学をあきらめていた小・中・高校生にも贈り、毎日安全に通学し、継続して教育を受けることができるようになりました。寄贈は公平に、より必要とする人々を優先できるよう、政府、現地NGO、村の組織などが協力しながら取り組んでいます。

同国東に位置するカタンドウアネス島は毎年多くの台風に見舞われ、深刻な被害が出ています。定期船が出ないと生活インフラが止まりますが、燃料が足りない自転車は、貴重な運搬手段として役立っています。

3月に同島であった国際交流プログラムでは、行政、学校の教師・保護者・子ども、農民などに本事業を、現地提携団体とともに紹介。さまざまな分野の協力者と意見を交換し、今後の事業の必要性や進め方について話し合うことができました。次世代のために村全体で自然を残せるよう継続的に活動する思いを新たにしました。

※この事業は競輪の補助を受けて実施しました。

2017年度 サイクル・エイド事業		
国	提携団体	内容・意義
タイ	TAFS	大阪府内の放置自転車を再生し、最も必要とされる地域へ贈る
フィリピン	KALUPI	

国内での普及啓発事業

市民の参加を促すイベントや講座

国内では、本会の活動に市民が参加できるよう、2016年度も多くのチャリティプログラムを展開しました。恒例のJAFSチャリティバザールは2回実施。クリスマスの時期に開く

JAFS THE PARTYをアジアンチャリティフェスティバルに変え、在阪外国人との交流を兼ねたイベントにしました。各地区会やファミリーグループでも、チャリティイベントやコンサートを催しました。

国際理解教育講座として

て、学校や団体に講義をしました。小学校、高校、大学やCSR関連機関など延べ11カ所(参加生徒・団員587名)へ講師を派遣し、より幅広い層の人たちへ講義をすることができました。学校や韓国のNGOからも委託され、国際理解について講義しました。

アジア家庭料理教室を

中心に料理を通じた文化理解に努めました。毎月さまざまな国の家庭料理を取り上げて13地域21回の教室を開き、延べ316名の参加がありました。

インターンシップ生

を、神戸学院大学、甲南女子大学から各2名と個人応募による1名の計5名受け入れました。本会事務局内の活動や国内でのさまざまなプログラムに参加しました。海外プロジェクトの啓発活動では国際協力について学び、今後の活動につながる研修をしてもらいました。

本会とネットワークを持つ18カ国と国内法人とのつながりを強め、国際貢献のできるグローバルな人材を育てるため、法人を対象とした国際貢献型グローバル人材育成セミナーを2回開きました。延べ59名が参加しました。

関係団体・機関とも緊密に連携し、さまざまな企画に協力しました。

関西最大の国際協力の祭、ワン・ワールド・フェスティバルに実行委員会



瀬田敦子チャリティーコンサート。タイの学生とともにタイ前国王を追悼する



第1エリアが催した中山寺子ども祭りではヨーヨー釣りが人気を呼んだ

メンバーとして加わりました。ネットワークNGOのJANICによる国際協力に関連するイベント、グローバルフェスタには、本会関東地区が代表として参加しました。関西NGO協議会、関西国際交流団体協議会などとも引き続き連携しました。

各地区で活発な活動

本会の活動をより多くの人たちに広めていくため、2016年度も全国各地域にいる本会地区世話人を中心に、広報、ぞうすいの会、ウォーカーソン、環境活動を基本プログラムとして、さまざまな啓発活動が行われました。エリア幹事会、地域活動推進委員会が中心となり、地域活動を強化しました。



JAFSチャリティバザールの恒例になっっている子どもたちによる沖繩舞踊

2017年度 社員総会報告

公益社団法人アジア協会アジア友の会第6回社員総会を下記の通り開催しました。定款第16条の定めにより田中理事長が議長となり議事を進行しました。現在の社員数229名の内、出席社員数160名(内書面評決者及び評決委任者108名を含む)であり、過半数に達し、総会は適法に成立していることを宣しました。

日時:2017年6月10日(土) 14時~15時45分
会場:大阪科学技術センター 8階中ホール
議案: I. 決議事項

第1号議案『定款の変更の承認』の件

第2号議案『監事の選任』の件

第3号議案『2016年度計算書類(貸借対照表及び正味財産増減計算書)、同附属明細書及び財産目録の承認』の件

II. 報告事項

① 2016年度事業報告並びに同附属明細書について

② 2017年度事業計画書について

③ 2017年度収支予算書について

上記の決議事項に関して、第2号議案『監事の選任』

の件については、社員会員による投票が候補者ごとに行われた結果、監事2名が選任されました。ほか第1号および第3号議案についても、異議なく承認されました。

報告事項①については、村上事務局長、および各事業の担当理事から報告がありました。報告事項②は村上事務局長より、「水」「子ども」「貧困対策」「環境保全」の開発支援事業の継続、国際交流事業における国際ネットワークの強化拡大、罹災者支援事業において熊本・フィリピン・ネパール・東日本での事業継続、国内における本会活動への協力者・支援者の輪を広げること、の事業計画が説明されました。

続いて海外プロジェクト報告会を開催し、インドの日印友好学園コスモニケタン、フィリピンのパンダン水道パイプライン、ネパール中部大地震支援、熊本地震被災者支援について、JAFSの各担当スタッフから報告しました。

総会・報告会後の懇親会では、会員による楽器の演奏もあり、和やかな雰囲気のもと会員相互の交流の輪が広がりました。

環境保全・教育を担う次世代の人材を育てる国際グリーンスカウトの一環として、2つの学校を開きました。和歌山県新宮市で開いた「土と水の学校」は33回を迎えました。総勢167名が参加し、5泊6日の充実したプログラムを実施することができました。宮城県名取市からの小学生参加者10名もあり、自然の中で子どもたちの交流が育まれました。

「農村と都市の交流」を目指し、自然体験だけでなく、農村に暮らす人々との交流を通して、自然と人、人とコミュニティのつながりを体感し、学ぶ実践型のプログラムを実施しました。ボランティアを含め合計50名が参加しました。

国際グリーンスカウトは、JAFSが提唱し、「Clean & Green」の標語のもとで地球環境保全を地域で推進しようという活動です。アジア各地でグリーンスカウトメンバーが活動しています。

活動情報誌「アジアネット」を年4回発行し、本会の事業報告や海外の情報などを会員に提供しました。また、新しい支援者を増やすため、全国の国際関連施設へ、情報コーナーなどでの閲覧用に送付を始めました。

環境学ぶ「土と水と緑の学校」



▲新宮市での「土と水と緑の学校」で、海岸の潮溜まりで生態観察
▲美山「土と水と緑の自然学校」で、臼ときねを使ってもちつき

ます。国内には現在、GS大阪、GS吹田、GS寝屋川・枚方の3部会があります。GS大阪は毎週木曜日に例会を開き、エコキャンプ、美山や新宮での土と水と緑の学校開催、環境プログラム、リーダー研修を行うと同時に、里親として教育支援をします。

吹田市の糸田川の清掃活動を続け、恒例の無人島キャンプを実施しました。GS寝屋川・枚方は、第2エリアの「北河内緑とふれあう会」のメンバーとして、その活動に参加しました。

ファミリーグループと支援会なども活発に活動

JAFSには現在、17の支援会、ファミリーグループがあります。さまざまなイベントやチャリティ活動に参加し、本会の支援事業の応援を精力的に展開しました。英会話や旅をすることから国際協力をする、英会話クラブ、旅人(たびんちゅ)などの新しいファミリーグループができました。

関連の市民団体である関西ナショナル・トラスト協会、日本を良くする会、グリーンベイOSAKAも、それぞれの設立趣旨のもと、活発に活動しました。

機関誌とネットで詳しく情報発信

ニュースなどを随時更新しました。ホームページは、各ページの具体的な内容がつかみやすく検索にヒットしやすいよう、各ページのタイトルを変更しました。フェイスブックでもイベントの広報、報告などを常時行い、海外

収支決算書 (平成28年4月1日~平成29年3月31日)

[1] 収入の部 (単位円)				[2] 支出の部 (単位円)			
科目	予算額	決算額	差異	科目	予算額	決算額	差異
1. 会費収入	27,100,000	20,705,000	6,395,000	1. 事業費	90,200,000	85,516,603	4,683,397
(1) 社員会費収入	6,000,000	5,116,000	884,000	(1) 水(井戸・飲料水供給)	29,500,000	27,691,222	1,808,778
(2) 維持会費収入	10,800,000	7,705,000	3,095,000	(2) 子ども(里親・教育・学校建設)	19,500,000	13,400,957	6,099,043
(3) 賛助会費収入	6,000,000	4,621,000	1,379,000	(3) 貧困(生活自立・職業訓練)	9,000,000	4,965,388	4,034,612
(4) 学生会費収入	0	0	0	(4) 環境(GS活動・植林・バイオガス)	4,600,000	4,483,030	116,970
(5) 団体会費収入	250,000	200,000	50,000	(5) サイクル・エイド事業	3,000,000	2,525,318	474,682
(6) 法人賛助会費収入	4,000,000	3,050,000	950,000	(6) ネットワーク推進事業	6,900,000	9,349,224	△2,449,224
(7) ジュニア会費収入	50,000	13,000	37,000	(7) 人材交流・育成事業	1,500,000	3,461,800	△1,961,800
2. 募金・寄付金収入	74,800,000	71,540,369	3,259,631	(8) 地域広報活動事業	12,000,000	13,046,024	△1,046,024
3. 事業収入	13,000,000	16,004,834	△3,004,834	(9) 環境保全・啓発教育事業(土水)	4,000,000	6,172,428	△2,172,428
4. 受取利息	5,000	4,364	636	(10) 災害等罹災者支援事業	200,000	421,212	△221,212
5. 雑収入	295,000	376,808	△81,808	2. 災害特別助成金支出(JPF)			
6. 災害特別助成金収入(JPF)	19,800,000	49,737,464	△29,937,464	(1) フィリピン災害復興支援事業	0	580,275	△580,275
当期収入合計A	169,580,000		△23,368,839	(2) ネパール地震復興支援事業	19,800,000	23,210,578	△3,410,578
前期繰越収支差額	8,449,108	8,449,108	0	(3) 熊本地震被災者支援事業	0	28,439,798	△28,439,798
収入合計C	178,029,108		△23,368,839	3. 管理費	24,920,000	20,650,719	4,269,281
				4. 退職給付引当資産取得支出	80,000	392,500	△312,500
				5. ソフトウェア購入支出	0	0	0
				6. 基本財産振替支出	0	2,500,000	△2,500,000
				7. 予備調整費	0	0	0
				当期支出合計B	135,000,000	161,290,473	△26,290,473
				当期収支差額A-B	0	△2,921,634	2,921,634
				次期繰越収支差額C-B	7,884,096	4,962,462	2,921,634

※6: (特活) ジャパンプラットフォーム(JPF) の補助を受けて実施しています

水道パイプラインができるまで ネパール

2月のワークキャンプは、カミ(ダリット)のようなカーストが低い人たちが住む、ボテシバ村第7区ダラパニで行われ、9つの集落の水場をつくる作業をしました。作業開始は2月22日ですが、我々は前日に現地に着し、受益者や地域の人たちと作業計画を打ち合わせました。

2月22日 日本のボランティア「サルスアクア」メンバー、AFSネパールのボランティア、地域の住人が3つのグループに分かれ、各グループに村の受益者が数名ずつ加わりました。午前8時半から正午まで、複数の作業場で作業を進めました。受益者たちは、自分たちのためにみんなが懸命に働いてくれているのだから協力しようという姿勢が強く見られ、極めて協力的かつ友好的な雰囲気でした。言葉の壁はありませんでしたが、作業は滞りなく、効率よく進みました。全員がお互いの存在を支えられていました。作業が終わった後、前回のワークキャンプの作業場を視察しました。午後2時半まで昼食や休憩をとり、作業を再開しました。夕暮れ時にテントに戻り、地域の人たちと初日の作業を振り返る場を設け

ました。村人たちの生活、文化、伝統、仕事、緊急事態時に直面する困難などについて理解を深めることができるよう、アンケート調査をしました。
2月23日 午前中は昨日と同じスケジュールで進みました。午後は学校を訪れ、課外授業として生徒たちと、一般的な事柄についてお互い質問を合いました。子どもたちは、日本人ボラ

ンティアチームが企画したプログラムに積極的に参加してくれました。終了後は一日の出来事を振り返り、翌日の作業計画を打ち合わせました。
2月24日 掘る作業を正午までに終え、パイプの埋設を始めました。日中は村の女性たちのニーズ、生活習慣、子どもたちに就いてほしい職業や、月経中にして良いことと悪いことなど、様々なことについて話し合う機会を少し設けました。
2月25日 作業最終日。早朝に丘の

上にある現場を視察。その途中でサラソティ小・中学校に寄り、日本人メンバーを見学しました。戻り次第パイプを埋める作業などをして、全作業が終わりました。夕方は、地域の住人や日本人メンバーが企画した文化交流プログラムを行いました。
2月26日 早朝に掃除と荷造りを終えて朝食をとると、感謝の儀式が行われました。ゲストは額にティカをつけてもらい、カトマンズへの帰路につきました。ありがとう！ナマステ！
(翻訳・ECC国際外語専門学校 和田紗知、田中美恵先生)

(注) ティカとは、神から授かった恩恵を表す赤い印

ボランティア・村人、力合わせて埋設作業



パイプを慎重につないで埋め込む



ボランティアと村民が協力し、パイプを埋めるみぞを掘る



開通した水道水場を囲んで記念撮影

How to Make Pipeline <Nepal Work Camp 2017>

February work camp was done in Dharapani, Bhotshipa ward no 7. People there are of low caste like Kami (Dalit). In this Work camp total 9 taps were made. The Work camp was started from February 22 but we reached there a day earlier and did some discussion with the beneficiaries and community people regarding the work plan.

February 22: The Salus Aqua team members AFS- Nepal volunteers and the community members all of us were divided into three working groups including the beneficiaries in each group. We started the work from 8:30 AM till the 12 noon. The working places were different. Everyone during the working time was very co-operative and friendly in a way like if they are doing it for our sake why not co-operate with them. Even if there was language barrier the working hours went very smoothly and efficiently. Everyone was enjoying each other's company. After the working hours we had a visit to previous work camp places. Then till 2:30 Pm it was a launch and rest time break, after that back to work. In twilight back to the tents and had a RECAP about the whole day work with the community members. Questionnaires were done with the villagers trying to understand their way of living, cultures, traditions, professions, difficulties they go through during emergencies and many more.

February 23:- The same Schedule as of previous day till Morning. Then in afternoon School Visit, extra curriculum activities for the students and general knowledge questions were exchanged. The students were very co-operative during the program organized by the Salus Aqua team members. After all this had a short recap in the meeting of the whole day and discussion regarding tomorrows work plan.

February 24:- Till 12 AM we completed the digging part started putting the pipeline. At the day time we had organized a short program with women of the villages regarding their wants, lifestyle, what kind of future do they want their children to pursue and also during menstruation what are the do's and don'ts they follow and many more.

February 25:- Last day of our work. Early morning went for the sight visit in the upper hills. On the way visited Saraswoti School and showed the salus aqua members the only health post available there, then after returning back from there completed the pipelining work i.e. pouring the soil above the pipelining area. After all this the work was completed. In the evening, there was a program organized by the community

people and also by the Salus Aqua team members.

February 26:- Early morning did all the cleaning and packing had breakfast and small ceremony was done as Thanks giving putting Tika's on the forehead for the guest, and then returned back to Kathmandu.

(AFS-Nepal Project Coordinator, Om K. Tandukar)

安全な水で健康な生活

寄贈井戸ができる前は、500m離れたため池で水をくんでいましたが、重労働なので、女性や高齢者は水を買っていました。ため池の水は家畜が水浴びや糞尿をするため、煮沸しないで飲むと下痢にかかり、抵抗力の弱い子はそれが原因で重病になります。トイレ設備がなく、手も洗わない生活では病気が蔓延し、低収入の家庭には、経済的精神的に大きな負担です。井戸のおかげで今までの生活から抜け出し、健康な生活を送れます。この井戸に心より感謝し、永く守っていきます。



タケオ州トレアン郡トメイ村
受益者…55名(9世帯)
井戸形式…露天井戸式(深さ19m)

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様 子どもが病気ににならない



タケオ州トレアン郡プレイ・パ・エイ村 受益者:50名(12世帯)
井戸の形式:露天式井戸(深さ19m)

自給農業で現金を得る道がなく、村は貧しいので自力で井戸を掘れません。収穫期を終えると出稼ぎや養豚、養鶏、ヤシ砂糖売りで現金を得ています。井戸を寄贈下さる前は500m離れたため池の水を利用していましたが、家畜が糞尿をしたりする水なので、子どもたちがそのまま飲んで下痢にかかることがありました。5歳未満児の死亡数は1,000人当たり38人(日本は2.9人)ですが、原因は水と思われます。病気は貧しい家計を圧迫します。井戸ができて心より感謝しております。

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

出稼ぎせず教育受けられる

村の Brun Touch さんは76歳。家族は出稼ぎや畑に出かけるので家の仕事はBrunさんの役目です。高齢のため水くみもできず、ため池の水を買っていました。不衛生ですが貴重でした。自力で井戸を掘ることが出来ない村のために井戸を寄贈下さり、経済的負担なく衛生的な水が得られます。子どもの健康が守られます。生活にもゆとりが生まれ、若者が出稼ぎで家計を助けずとも、教育を受けることができ、これからは村を変えていくことでしょう。ありがとうございます。



タケオ州トレアン郡トラペアントム村
受益者…31名(7世帯)
井戸の形式…露天式井戸(深さ20m)

ご寄付には
税の優遇措置が
受けられます

なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■(地域によって異なります)

インド=55万円 フィリピン=30万円 カンボジア=25万円

ミャンマー=20万円 スリランカ=20万円

ネパール=15万円(パイプライン=25~150万円)

バングラデシュ=浅井戸20万円、深井戸50万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です

・三菱東京UFJ銀行 大阪中央支店 普通 1968711

■お振込み先■

公益社団法人アジア協会アジア友の会

・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会
06-6444-0587へ

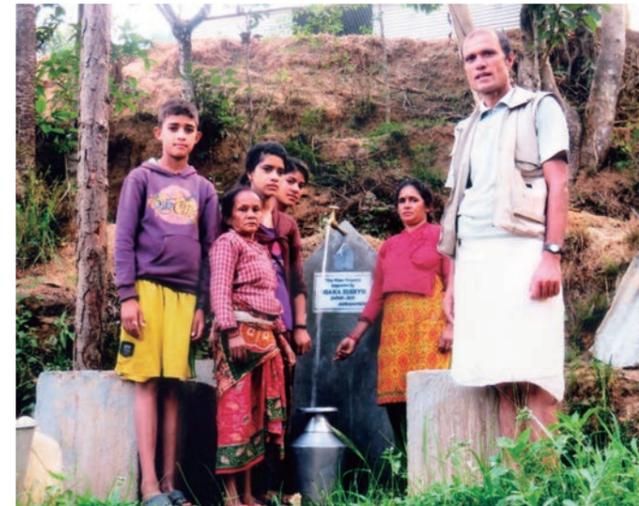
安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで
井戸ができた村

【寄贈者】大阪水龍主催者様

地震で失われた水が戻り村人に笑顔

バグワティ県シンドウパルチョーク郡ボテシパ村
受益者…150名(35世帯)
井戸形式…水道パイプライン



標高1,000mを超える山頂に広がる村。幹線道路と離れているため開発が遅れ、2015年の地震で大きな被害を受けました。自分で建てた仮設小屋で暮らしています。比較的水に恵まれていたのですが地震により水源が変わり、暮らしが一変しました。生活用水や農業用水にも事欠き、野菜不足による体調不良に苦しめられていました。1,600リットルタンクを設置して水を得ることができました。昔ほどの水量はなく取水に時間制限をしていますが、村人により笑顔が戻ってきました。

野菜もつくれて健康が改善

標高1,000m超の山頂にある開発が遅れている村です。昨年の地震で壊滅的被害を受け、自分で建てた仮設小屋で暮らしています。以前は良い水源があり、水に困らなかったのですが、地震後は水が出なくなり、生活や農業用水も不足するようになりました。新しい水源から水を引くことができ野菜の栽培も可能になり、健康が改善してきました。1日6時間の取水制限をしていますが、水の不安から解消され、住民にも笑顔が戻ってきました。感謝しています。



バグワティ県シンドウパルチョーク郡ボテシパ村
受益者…55名(12世帯)
井戸形式…水道パイプライン

【寄贈者】鷲見英二様

料理に安全な水を使える

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

自給農業のため現金収入がなく、畜産や出稼ぎで現金収入を得ています。村のSuon Sreyroth (29歳)には2人の子どもがいますが、不衛生な水のため病気になると、精神的、肉体的、経済的に大きな重圧です。みなさまが慣れない気候の中で井戸を作ってください、心より感謝しています。女性が水くみの重労働から解放され、心配なく料理に安全な水を使えることは大きな喜びです。水こそ生活の基盤であり、健康の源です。永くこの井戸を守り続けていきます。



タケオ州トレアン郡プレイスルック村
受益者：55名(11世帯)
井戸の形式：露天式井戸(深さ16m)

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様



タケオ州トレアン郡プレイスルック村 受益者：73名(12世帯)
井戸の形式：露天式井戸(深さ12m)

将来に夢が持てる

みなさまが慣れない土地で井戸掘りの重労働に耐え、井戸を寄贈くださり、住民は心より感謝しています。自給農業の貧しい農村で、現金収入は畜産と出稼ぎのみです。新しい井戸を掘ることは不可能でした。生活用水を家畜が糞尿をするため池に頼り、水くみの重労働と病気の恐怖の中で暮らすため、将来に夢を持つこともできませんでした。井戸によって衛生的な生活ができます。女性は家族の食事や炊事用具を衛生的に保つことができ、安心して暮らせます。

水と教育の支援に感謝

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

遠く日本から、みなさまが村に来られ、寄付だけでなく、ワークキャンプをして井戸の建設作業をし、ご寄贈くださいました。今後、不衛生な池の水を買うことがいなくなりました。病気による経済的負担がなくなり、生活が向上します。カンボジアでは都市を中心に開発が進み、若者が高校を中退して出稼ぎに出て、農村が空洞化しています。村の発展のため若者の力を必要としますが、その一助が井戸であり教育支援です。ご支援に心より感謝申し上げます。



タケオ州トレアン郡トラベアン・トム村 受益者：31名(7世帯)
井戸の形式：露天式井戸(深さ20m)

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

タケオ州トレアン郡クラウン・トベア村
受益者：49名(10世帯)
井戸の形式：露天式井戸(深さ21m)



若者が村に留まる希望

井戸ができるまで1.7kmも離れたため池に生活用水を頼り、子どもは煮沸せず飲むため下痢などの病気にかかっていました。トイレ普及は20%未満で手を洗う習慣がなく、重症化すると家計に重い負担となります。衛生的な水の要望は高まる一方でしたが、遠く日本から来て井戸を建設して寄贈くださり、心より感謝いたしております。若者が学校を中退し、都会に働きに出て村は空洞化していましたが、生活基盤の整備と教育の続行で、村も変わっていきます。

笑顔が増えて農業を再開

【寄贈者】長浜北ロータリークラブ様

地震後、これまで使っていた水源地の水位が下がり、水を得ることが困難になった村です。家が倒壊したことに加え、水を遠方に取水しに行かなければならない生活が続きました。その大変さもさながら、農業が全くできない状況となり、行き詰まった生活でした。このたびのご支援により、15,000リットルの集水タンクを設置して新しい水源地から水をひき、集落に3カ所の水場を設置しました。設置後は生活を取り戻すことができ子どもも大人も笑顔が増え、農業も再開できました。



バグワティ県シンドウバルチョーク郡シパカカリ村
受益者：230名(40世帯)
井戸の形式：水道パイプライン

病気と水くみから解放

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

動物が糞尿をするため池の水が生活用水でしたが、1.7kmも離れているため、水を購入することもありました。貧しいため深井戸を掘ることが出来ず、病気などで苦しんでいましたが、遠く日本からみなさまが来てくださり、井戸を建設くださいました。Sok Seveth (43歳)には6人の子どもがおり、下痢など病気になると精神的経済的に大きな負担です。寄贈井戸のおかげで子どもたちは病気になることもなく、これからは水くみの重労働から解放され安心して生活を送れます。



タケオ州トレアン郡クラウン・トベア村 受益者：74名(15世帯)
井戸形式：露天式井戸(深さ22m)

京料理の伝統と日本の食文化伝えて300年



美濃吉本店 竹茂楼

京都市東山区夷町166
☎ 075-751-8881
代表取締役社長：
佐竹 力 総

界に誇る日本の食文化の伝道師としての自覚と誇りを胸に刻み、1200有余年、皇都で培われた京料理をさらに発展、進化させていくというロマンに挑戦してまいります。

●株式会社 美濃吉

本年（2017年）、お蔭様で美濃吉は、記念すべき創業300周年の節目を迎えることができました。起源は享保元年（1716年）、八代将軍吉宗のころ。秋田、佐竹の流れをくむ佐竹十郎兵衛が美濃大垣から京都に出て、三条河原において腰掛茶屋を営んだことに始まります。後に京都所司代の許可を得て「川

魚生洲八軒」の内の現存する唯一の店として、今日まで10代300年の永きにわたり、京料理の歴史と共に商いをさせていただいております。幸い2013年12月「和食：伝統的な日本の食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、和食業界が全世界から脚光をあびています。今後とも、私たち美濃吉マンは「世

新・The 社会貢献

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

洋食器・厨房設備…飲食ビジネスをお手伝い



大阪市浪速区日本橋東3丁目3-25
☎ 06-6633-9100
代表取締役：出口 貴之

食市場ですが、海外に目を向ければそちらにも多くの可能性があるかと存じます。その可能性を最大限に活かすことの出来るサポートを目指し、尽力致しております。

●株式会社 宝屋

1965年に前身の宝屋商會を大阪市浪速区で創業して以来、洋食器販売、厨房設備設計・施工、厨房器具設計を主軸に、飲食関連ビジネスのお手伝いを行っております。ここ数年、国内の外食市場は比較的堅調に推移しておりますが、1997年より緩やかに市場規模を縮小しており、当時と比べますと現在でも10

%程度の縮小が見られます。その為、日本から海外へと目を向け、レストラン経営を目指す方が増えております。弊社では、そのようなニーズにもお応え出来る様、東南アジアを始めとした海外での現地調査や、厨房設計、機器・備品の販売をはじめとしたサポートも行っております。現在では比較的堅調な国内外

島の水源地 植林が育む

比・パロンバナネス島ワークキャンプ

パロンバナネス植林ワークキャンプが3月14日〜20日に日本から7名の参加で行われました。パロンバナネス島はフィリピン・マニラ市から東へ約300キロメートルに位置し、面積274平方キロメートルの小さな離島です。

人々は主に漁業で生計を立て、協力しあいながら暮らしています。島では1950年頃から焼畑、森林伐採が進み、現在では草原が広がり、木々は低木がところどころに植えられたバナナの木のみのみです。雨が降っても島で保水することができず、そのまま海に流れ去ってしまいました。村人たちは限られた水源地から毎日の水の確保に困窮しています。飲み水はカタンドウアネス本島から運ぶか、水源から手に入れるために毎日列をつくり、ボトルに入れて運ぶのが日課となっているのです。村の水源地を守るために10年前から植林のための国際ワークキャンプをしてきました。

⑤ 水源地である学校の裏山に植林 10年前に植えた木々は大きく成長し実をつけている 3月、パロンバナネス島

今回は学校の子どもたちと一緒に、6種類500本の苗木を植えることができました。マルバリ、ガヤバノ、ランプータンは果樹で、実を食べることも収入源にすることもできます。アナハウ、タリサイ、ポトンボトンは、葉が大きく陰をつくり、落ちた葉は土壌に栄養を与えてくれます。

ASI（アジア社会科学院）のスタッフで農業や植林の指導をしているジュメデスさんが、村人たちに木々の特徴や育て方を丁寧に説明していきます。植林する山肌は急な斜面でしたが、子どもたちが日本からの参加者の手を引っ張り、担いできた苗木を植えていきます。まずは細長い棒やスコップで穴掘り。鋭い草の葉やしっかり張った根っこをよけながらの作業です。背の高い雑草の中で植えた苗木が枯れないように、日本の参加者からのアイデアで苗木の周りは広めにあげ、根の周りには刈った草をまいて、少しでも多く育ってくれるよう、祈りを込めて植えていきました。

乾期にもかかわらず、水源タンクの水量は以前より確実に増えてきました。7、8年前に植林したココナッツは10以上育って立派な実をつけ、甘いジュースはカラカラにかわいた体に優しくしみこんでいきました。

また、今まで作物は焼き畑に頼ってきましたが、有機栽培などを指導し、庭に菜園を作る家庭も増えてきました。野菜を多く摂れるようになり、村人達の健康改善にも役立っています。

最後の夜、学校の先生方を中心とした村人たちに日本食を振る舞い、語り合った中で、年長の先生から印象深い言葉をいただきました。

「日本人が訪ねてきて植林を行うまで、自然に囲まれていながら、私たちは自然の大切さがわかっていなかった。自然を愛し、未来のために育んでいくことを学べたのが一番の大きな気持ちの変化で宝物です。これからは学校で植林した木々を育てながら子どもたちに伝えていきます」

島の人口約2000人の中で、15歳以下の子どもが約800人!! ホームステイ先のお母さんも11人の子どもの産み、現在も子育て真最中です。

小さな島での資源の共有やゴミ問題などの大きな課題もありますが、一つ一つ話し合いながら改善していくことで、笑顔あふれる島の未来が守られていくように感じられた7日間でした。

(JAFSスタッフ 岡本佳子)



国内外の様々なイベントをHP (<http://jafs.or.jp>) に掲載しています。
最新情報をチェックしてぜひご参加ください。

春の野を駆け巡る ジャズにうつと

ジャズピアニスト、竹中真さんのチャリティコンサートが4月1日、東京都杉並区の日本基督教団久我山教会で、JAFS関東の主催で開催されました。小雨にもかかわらず50人以上が来場し、春の野を駆け巡るような自由で軽やかなピアノ演奏に酔いしれました。



竹中さんはトークも巧みで、演奏旅行での出来事や日本の音楽教育の歴史の話などを織り交ぜ、ジャズアレンジした日本の歌、クラシック、讃美歌などを、時に激しく、時に厳かに、楽しそうに奏でられました。力強く慈しみに満ちたピアノの音色が、木づくりの礼拝堂いっぱいに広がり、夢の世界にいるようでした。後半では、女優・甲斐まり恵さんが飛び入り出演、ジャズのスタンダードナンバーを披露してくれました。写真：咲いた花のように可憐で美しく、思わぬ4月1日のサプライズプレゼントに、みな大感激でした。

このコンサートは、モンゴル、ウランバートルのゲル地区に貧しい人たちのために設立した保育園の支援を目的に催されました。コンサートの最後に、現地で運営にあたるJAFSモンゴルのエンフトヤさんが、行政支援から外れたゲル地区で子どもを育てることの困難さや園の運営状況、政府からの補助獲得につなげる努力、将来への希望などを話しました。

京都ではフィリピンの高校生が共演

4月8日、花の雨のなか、京都地区会は、ジャズピアニスト竹中真さんのレッスンを受けるために来阪中のフィリピン、パンダンの高校生アドレイ・コンデスさんをゲストに迎え、京都市上京区の「バザールカフェ」で開かれました。写真：彼は生まれつき視覚障害があり盲目ですが、音楽の才能が豊かです。「フィリピンの障害者教育」について語り、ギターとピアノを竹中さんと共に演奏しました。



この会でアドレイはスピーチをする。竹中さんが「アドレイは若いのに、オールディーズのアメリカンポップスやビートルズの曲が好きで、お父さんのピクチャーは逆にロックがお好み」と軽妙に紹介して、演奏会が始まりました。竹中さんとの共演では、得意の「マックザナイフ」「イエスタデイ」などを、気分よくギター演奏し、大きな拍手に包まれ、お辞儀をする姿に嬉しさが溢れていました。竹中さんのピアノは、澄んだ音色が優しく、殊に「グリーンスリーブス」は、聴く者の胸にしみ入る演奏でした。

スピーチは父ピクチャーさんの助けもあり、生い立ちから現在までを無事に

語り終えました。3歳の頃、おばさんにプレゼントされたキーボードを自然に演奏したことから、彼の今日があることを知り、幸運な巡り会いに思いを馳せる一夜になりました。

(JAFS会員 吉田暢子)

春爛漫のお花見ウォーク



なにわ西エリアでは4月1日、ウォークツアー「春爛漫、千本桜の京街道と大川端を歩く」を開催し、42名を集めて、大阪の京橋駅から桜宮まで歩きました。惜しくも桜はチラホラ咲きでしたが、大阪おもしろ案内人・沖本然生さんに、「心中天網島」の元になった恋物語、夭折した悲運の作曲家・貴志康一、大阪財界産みの親・藤田伝三郎などについて話していただきました。夏には「はもなべ」パーティー、秋

には、5月に雨で中止になった京都太秦ウォークツアーを再び企画しています。これらで得た寄付を、南インドの児童への教育支援や、モンゴルの幼稚園建設支援に使う計画です。

(JAFSなにわ西地区世話人 篠塚達朗)

異文化を学ぶぞうすいの会



地域に住む方やご縁のある方から異文化を学び、交流を深めようと、「富田林ぞうすいの会」を発足。4月29日、大阪・富田林駅近くのMAPカフェを借り切って第1回を開きました。ネパール南部タライ平原で農民となつて暮らされている藤井牧人さんのお話をうかがいました。土や自然と向き合いながらの循環型有機農業。村人が共同作業し、収穫や肉などを平等に分配する結いのような共同体。生活用具

などにも伝統の知恵と工夫が凝らされ、自然体でたくましい村の人々や暮らしの様子が紹介されました。会場ではネパール出身パダマさんがつくった豆カレーをネパール米で味わい、チャイとネパールのお菓子で食文化も楽しみました。JAFSがネパールで催したチャリティコンサートや現地の様子も報告されました。

富田林地区会では、これまで地道な活動でネパールの教育支援を続けていきましたが、新しいメンバーが結成され、ますます活発になりました。今年度、7月1日のBBQ&テニス、10月28日の滝谷不動巡りなど幅広い楽しい企画で仲間づくりをします。

(JAFS第4エリア幹事 橋本末子)

歴史と文化を学ぶ熊野塾



第1回熊野塾が和歌山県新宮市高田の里(雲取り温泉)で5月13~14日、1泊2日で開催されました。前日出発組3名。13日大阪からの参加者10名は車に分乗して出発。開校1時30分の前には現地参加者に加え、雲取り温泉に全員が集まりました。新宮市の高校教諭だった瀧野秀二さんがパワーポイントを使って熊野地方

の花々や木々の自然植生について講義されました。四国や九州との気温や年間降水量の比較など、深い研究に裏打ちされた話でした。特にパワーポイントで写された熊野特有の花々が印象的でした。

続いて、新宮市の公務員であった中西洋さんは、熊野地方の神話や、世界遺産に登録された熊野古道や歴史、風習、祭りなど、多岐にわたり興味の尽きないお話をされました。翌日は、車に分乗し所々で熊野古道に接しながら緑滴る山々をドライブしました。熊野塾は、多くの課題を抱える現代の物質文明の中で今一度、日本人の心の原点でもある熊野を出発点として見直そうという試みです。精神文化の高揚を目指し、一年かけて勝浦漁港、湊八丁、勇壮なお灯祭り、熊野古道巡りなど、熊野の文化に触れる計画です。一般の参加者も大歓迎で、何回からでも参加できます。

(編集スタッフ 岩崎準一)

警戒深め戸惑う被災者

初夏の暑さが厳しくなってきた。熊本県上益城郡益城町。麦、米の二毛作が盛んなこの地域で、稲作の準備が始まっている。ふるさと東北では、もう田植えの時期。遠く九州に来て活動しているのだと改めて思う。

活動を通じて感じることは、地域コミュニティ再構築の重要性と、それに支援者として参加するジレンマだ。

1月末に熊本に入ってから4カ月。益城町にある18仮設団地のうち4カ所の小規模仮設団地を担当することになった。自治会をサポートして安全安心な、自立した生活を送れるように支援していく。がれき撤去のように自らが前線で作業するのではなく、縁の下の力持ちである。

「支援団体が入るなら自治会はいらない」「支援団体の連中がみんなの家（仮設団地の集会所）を占拠している」といううわさを聞いた」という声があり、警戒心や戸惑いが見られた。自治会の支援というのを理解していたくまでに時間がかかった。

入居が抽選で決まり、別々な所で暮らしていた人が集まる。「地域では顔も見たことがなく、どんな人か分からない」「仲が良い地区の人たちの中

仮設団地にコミュニティづくり

コミュニティ麻雀会（神戸社会福祉協議会と協働）で交流する人々＝5月8日、熊本県益城町惣領仮設団地



に、他の地区の人が入って行くのは難しい」などと言われる状況を解消するため、自治会長は人々が集まれるように多くのイベントを受け入れる。ある団地では月に28団地を受け入れたという。日程調整や場所の案内、時にはお弁当の手配をしている所もあった。支援が多く入る団地、まったく入らない団地。声をかけてきた団地をすべて受け入れる、あるいは、受入れずに

「孤独死防げ」—自治会と連携して情報交換

自主的な活動を企画する。自治会長の個性と考え方により、各団地で状況が異なる。

各団地の自治会長さんが集まり、自治会連合会が立ち上がった。課題やその解決方法の情報交換や、仮設団地全体から行政への要望も可能となった。支援団体もこの動きと連携しながら、隔週で集まり、情報交換をしている。先日、ある団地の総会があった。

「自分の家のこともできないでおり、負担となっている」と会長が辞任するという。「仮設が残っている限り、誰かが役員にならなければならぬ。自分の事として考えて欲しい」と訴えたが、なかなか伝わらない。向こう三軒両隣のような近所の繋がりをこのことにより住人同士で課題を解決し、仮設もその先の暮らしも、より良いものになるようサポートしていきたい。

黄色い旗で安否を確認

ある団地で60代男性の孤独な病死が発生した。死後5日たっていた。日本の日常の問題が仮設団地でも起こった。今後どうすれば防げるのだろうか。

この団地では、黄色い旗を配り、朝に軒先に掲げ、夕方取り込むという黄色い旗運動をすることにした。近隣住民が気付く、すぐ、病院に搬送できるような体制づくりになればと思う。

地域の未来に向けて一体となった活動をしている地区がある半面、孤独死

も寄与できる生き方をしていきたい。

力を合わせて交流農園

小池島田仮設団地の一角に交流農園をつくった。震災で機械や田畑が被害を受けて農業をやめた農家がいるというのを聞いたからだ。狭い仮設住宅に閉じこもってしまうことが一番心配。我々の農作業を監督、先生として指導していただくという体で外に出て

もらおうということだ。

企画を一部の住民に伝えると、なんと、その日のうちにトラクターが入って耕してしまった。草ぼうぼうの空き地があつという間に畑になった。そこからうねを立て、苗や種を植え、ハウスをつくり、形は見事な農園になっている。夏野菜を収穫して味わうのが楽しみだ。収穫祭を行うのもいい。熊本の現状や課題を実際に見て聴い

て感じていただきながら、自分の身の回りでも起こっていることとらえていただき、この社会問題の解決を一緒に考えていければと思う。

(JAFS熊本地震被災者支援 現地事業統括補佐 小野孝弘)

※この事業は一部、ジャパンプラットフォームホームの支援を受けています。

新入会員ご紹介

ご入会感謝申し上げます。(敬称略・50音順)
2017年2月21日～2017年5月31日

個人情報のため割愛

会費納入者、寄付・物品協力者

温かいご支援ありがとうございます。(敬称略・50音順)
2017年2月21日～2017年5月31日
なお夏季・冬季募金へご協力くださった方につきましては、1年後の夏季・冬季に別紙にてご報告させていただきます。

個人情報のため割愛

個人情報のため割愛

個人情報のため割愛

大阪城北RCからアジアに井戸寄贈



大阪城北ロータリークラブ（森本匡昭会長）が創立40周年の記念事業の一つとして、チャリティオークションの収益金でアジアの村へ井戸を寄贈することを決められ、本会がその委託を受けてカンボジアとスリランカに井戸を建設することになりました。

5月17日に開かれた同クラブ例会の席上、森本会長から本会へ収益金が委託されました。厚志に対し、本会の村上公彦事務局長から感謝状を贈呈しました。写真。

（JAFSスタッフ 永井博記）

里子の笑顔

勉強したくても経済的な理由で学校に行けない、進学のを絶たれる。アジア協会ではそんなアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。今回はネパールの里子の生活をお伝えします。

学校の幼稚園クラスで学ぶ8歳

2005年から里親の会で支援しているネパール・チュニケル村のナウリンセカンダリースクール。小学校から高校1年生まである、村で唯一の公立校です。首都カトマンズ近郊の村ですが、以前は道が無く取り残された地域であり、農業で細々と生計を立てていました。今は道がでかバスが通るようになり、村の学校を卒業した生徒たちは、高校2年生以上はカトマンズ市内に通学もできるようになりました。最



近もつとも変わった学校の様子が、他の地域から移住した子どもが増えたこととです。多くが日雇いの労働者や非正規雇用の低賃金かつ低所得者です。4月中旬から新年度が始まり、一人の8歳の女の子ジマ・トンジャールちゃんが入学を希望してきました。彼女もまた移住者です。おしゃべりは堪能なジマちゃん。しかし字は一つも書けませんし、生活習慣も身につけていません。実は今まで学校に通っていません。実は今まで幼稚園クラスに入学許可を出すしか対応策が無く、自分の半分の年齢の友だちとの学校生活が始まりました。未だ制服もありませんが、級友と仲良く楽しそうにおやつを食べる姿が印象的でした。彼女のチャレンジが学ぶことの楽しさへ繋がっていくことを願いつつ、今後を見守っていききたいです。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

環境コラム

4月14日にスリランカでごみ処分場のごみ山が崩壊し、30人以上が生き埋めで死亡する事故が起きました。ごみ山周囲に建つ貧困層の家も多数倒壊し、被災者は1000人規模。日本政府にも緊急援助要請が来しました。自然の土砂崩れならぬ、ごみ山の崩壊による緊急援助とは。衝撃を受けた私はアジアのごみ事情を調べたりJAFSスタッフに聞きました。

フィリピンのごみ山スモークマウンテンはメディアでも取り上げられ、知る人は多いと思います。

名前の由来は、ごみ山

アジアのごみ事情

が自然発火して煙が昇

た。スリランカのごみ山も、見られる光景はスモークマウンテンと同様。市中から回収して野ざらしに積み上げられたごみの山、そこから金属・プラスチック・ガラス等の有価な廃品を集めて売るため群がる人々、ごみ山の周囲に建つ彼らの簡素な住まい。調べるとアジアの他の国々(インド、ネパールなど)も、驚くほど似通った状況が見られるようです。ごみ山方式は、アジア諸国の行政の正式なごみ回収処理法ということも初めて認識し驚きました。ごみ回収後に焼却し地中に埋立てる日本のような処理は、コストが高いためしない方針なのです。焼

「アジア里親の会」里親募集

- 対象国はインド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、フィリピンです
- 会費は里子1人年額20,000円。複数も可です
- 里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

アジアの友が



フィリピン、AFSカリビ財団 前理事長 故ジミー・クナナン氏

本会4番目のアジア友の会(AFS)の部会であるカリビ財団の理事長ジミー・クナナン氏が、4月1日に心臓麻痺で亡くなった。1935年4月生まれ、当年82歳であった。ジミーとは83年に、本会創設会員の一人である河内長野市の木下桃太郎氏(故人)の紹介で出会い、以来34年のつきあいであった。当時ジミーはベッド会社の役員をしながら、地域YMCAの活動に参加していた。大学を出てしばらくはジャーナリスト、後に警察官となったが、その警察官の経験と仕事ぶりを買われて、若干38歳でベッド会社の役員に迎えられたとのことである。小生と出会った時は、会社の金儲けに飽きたので社会奉仕活動をしたこととから、本会の水事業に共

AFS活動をフィリピンに広げた

彼は本会の理念「貧困なきアジア社会の創造に向けて」に深く賛同し、AFS活動を草の根運動として、広くフィリピン全土に広げることと尽力した。現在フィリピンには、10のAFS部会がある。ジミーには8人の子供があり、大学教授の息子が2人、検察官が1人、高校の先生が1人、食物会社経営者が1人、主婦の娘が2人、そして彼の跡を継いでいる末娘イロイザである。みんな父ジミーを手伝い、陰ひなたになって応援してきた。父の死の前に、生前の活動を忍び、家族が一丸となって改めて父の活動の継続を誓った。ジミーの働きが彼らの心の中に復活したのである。冥福を祈ります。

(JAFS事務局長 村上公彦)

編集後記

今 号から記事の一部を英文でお届けします。グローバル化の時代、海外の提携団体や在外国人の方への情報発信の試みです。(敏)

今 回の誌面、また素晴らしく見やすい画面になりました。部分的に英語の記事も掲載しました。アジアネット、皆さんと共に進んでいきましょう。(金)

今 年度は2つのAFS国際会議を、大阪と奈良で8月と10月に開きます。多くの課題が有され、より良い地域づくりに貢献できることを願います。(博)

緑 のさわやかな風をいっぱいうけて、花々や木々がさわさわと揺れるのを見ると、何かに感謝したくなるような、うれしい気持ちになります。(真)

前 号環境コラムのクロスワード。正解は「どんぐり」でした！ご応募下さった少数精鋭の方々、解いて下さった方、ご参加ありがとうございました。(川)

フ イリピンのストリートチルドレンの実態を学ぶ機会があった。問題の大きさ・根深さにショックを受けた。それ以後彼らのことが頭から離れない。(和)

阪 神淡路大震災から22年、悲惨な記憶もだんだんと薄れていきます。いつか起こると言われる南海大地震の備えは？何の備えもない私自戒しきりです。(若)

協力スタッフ募集

JAFSの会員拡大、イベント・企画を助けてくださる協力スタッフを募集します(活動費支弁あり)。アジアの貧困をなくすための仲間づくり「百万人友の輪運動」をアジア全域で進めています。国内各地域でも仲間の輪を広げてください。ぜひご応募ください。

入会ご案内

会員となってサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

- | | | |
|-------------------|------------------|---------|
| A. 維持会費 | 年額1口 | 12,000円 |
| | (月額1,000円) | |
| B. 賛助会費 | 年額1口 | 6,000円 |
| | (月額600円=振込手数料含む) | |
| C. ジュニア会費 (高校生まで) | 年額1口 | 1,000円 |
| D. 団体会費 | 年額1口 | 20,000円 |
| E. 法人賛助会費 | 年額1口 | 50,000円 |

会費・寄付の振り込み先
郵便振込
00960-6-10835 アジア協会アジア友の会



▲ニッパ椰子の屋根に色鮮やかな魚が干され、栄養満点な干物ができます。植林による森づくりで海も再生します。2017年3月、フィリピン・パロンバナス島

◀表紙の写真 年に一度のコミュニティフォレスト入域許可の日、森で成長した茅を刈り自宅に運搬する村の女性。茅は家の屋根やフェンスを作る大切な建材となります。2016年12月2日、ネパール・ピトゥリ村



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人たちを支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL : <http://jafs.or.jp> E-mail : asia@jafs.or.jp

2017年7月 130号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎 編集アドバイザー：黒沢雅善

編集スタッフ：佐藤眞子、永井博記、岩崎準一、大本和子

金井英夫、川本裕子、安田剛大

編集協力：ECC国際外語専門学校/ECC Translation Club

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社

